

## &lt;Ⅶ 博物館実習報告(2)&gt;

## 実習レポート

川畑 友華理<sup>\*1</sup> 山本 梨恵子<sup>\*2</sup>  
横田 茉緒<sup>\*3</sup> 田制 優美<sup>\*4</sup>

館園実習報告：陸前高田市立博物館／リアス・アーク美術館

実施日時：2019年8月5日（月）～8月9日（金）

現代家政学科4年 川畑 友華理

2019年8月5日から8日までの4日間、岩手県の陸前高田市立博物館で実習を行った。8月5日は、視察を行った。6日は、猫渚神社に奉納された猫絵馬の運搬を行い、7日・8日は猫絵馬の整理と記録を行った。8月9日は宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館の視察と、岩手県陸前高田市気仙町字湊にある津波碑の拓本を行った。

陸前高田市立博物館は、昭和34年開設の東北地方で最初の登録博物館であり、歴史民俗から自然科学までを扱う総合博物館である。2011年の東日本大震災により、多くの学芸員の命が奪われ、また多くの資料が被害を受けた。被災後、全国の学芸員やボランティア、自衛隊の協力により、多くの資料が救出された。泥や油などの洗浄はすぐに行われたが、国際的にも海水損した資料の安定化処理は未確立であるため、被害を受けた約46万点のうち約半分の資料が、震災から8年経過した今でも保存に向けた安定化処理が終わっていない状態である。現在は休館しており、2011年3月に閉校した旧生田小学校校舎を使用した仮設博物館となっている。2021年に新博物館が開館予定であり、開館後は、現在の仮設博物館は収蔵庫となる予定である。

東日本大震災の被害を受け、開館にむけた準備中の陸前高田市立博物館で実習を行うことにより、博物館の復興の現状や課題を学ぶことを目的とし、実習を行った。実習から学んだことは、次の4つである。

## ①復旧予算の少なさ

2020年度で、復旧予算が終わるが、被害を受けた資料の約半分しか修復は終わっていない。比較的修復しやすい資料から安定化処理を行ったため、復旧に時

間がかかると考えられる資料の修復作業が現地点で約23万点も残っている。震災から8年半経った現在、約半分の修復作業が終わったことを考えると、少なくともあと10年は修復作業が終わらないだろう。

## ②海水損した資料の安定化処理の難しさ

東日本大震災は、大規模な津波により、深刻な被害をもたらした。海水損した安定化処理は、国際的にも未確立であるため、安定化処理をした後に経過観察を行い、脱塩できているかを確認する必要がある。そのため、脱塩の作業には多大な時間が必要である。

## ③国の災害復旧の考え方

災害復旧とは、災害のあった前日に復旧させることである。つまり、東日本大震災のあった前日、2011年3月10日の陸前高田市立博物館に戻すことである。現在の同館の役割は、東日本大震災の記録を残し、どのように復旧させていったかを後世に継承していくことだろう。しかし、そのための予算は、災害復旧の予算からは賄われない。そのため、新博物館で展示予定である震災の展示は、災害復旧の予算以外で賄わなければならない。

## ④陸前高田市民からの期待

陸前高田市立博物館のほとんどの資料が、市民からの寄贈である。震災後、津波により博物館の資料はあちこちに流された。資料を見つけたら、博物館に電話したり、実際に持ってきたりする市民もいた。寄贈したものを返して、という市民はいなかったが、寄贈した資料はどうなってるか問い合わせる市民はいた。これらから、博物館に対する市民の関心の高さが分かる。

以上四つの学びから、次のように考えた。

陸前高田市立博物館の復興は、市民から期待されているが、津波の被害を受けた資料の修復作業は、脱塩の作業が未確立であるため、時間がかかっている。新博物館開館後も、修復作業は続くだろう。国は、復旧予算を増やし、2020年度以降も、長期間にわたる予

\*1 川畑 友華理（かわばた ゆかり）令和元年度現代生活学部現代家政学科4年

\*2 山本 梨恵子（やまもと りえこ）令和元年度現代生活学部現代家政学科4年

\*3 横田 茉緒（よこた まお）令和元年度現代生活学部現代家政学科4年

\*4 田制 優美（たせい ゆうみ）令和元年度現代生活学部生活デザイン学科4年

算を組むべきである。また災害復旧を、震災前日に戻すことと考えるのではなく、震災の起きた後で陸前高田市立博物館に求められる「東日本大震災を記録し、保存し、継承していく」役割を踏まえて考えるべきである。

今回の実習を通し、学芸員を取り巻く被災した博物館の環境は課題が多く、復旧には国の力が必要であることを学んだ。

## 2019年度 博物館実習報告

現代家政学科4年 山本 梨恵子

8月5日から9日までの5日間実習生4名、先生方で行った。5日から8日は陸前高田市立博物館で実習を行った。この博物館は東北最初に設立された登録博物館である。歴史資料や民俗資料等が約46万点収蔵されている。震災当時、大津波は博物館への被害だけでなく働いていた学芸員の方の命まで奪った。3月11日午後、建物は泥水で屋根がバラバラ状態となり、土煙も出て津波は数度に及び4階の高さまで達していた。また、被災直後地震は3回繰り返され不安が続いた。4月16日に自衛隊が来て生存者の探索と、同時に資料の救出が始まった。2021年に新博物館が開館予定である。

1日目は被災時の状況や復興、博物館の作業内容の説明を聞いた。また収蔵庫や設備を見学した。収蔵庫では魚をとるための道具や資料の管理方法等を学ぶことができた。また、資料の管理は脱塩し加圧するという難しい工程があり、学芸員の大変さを実感した。

2日目は、陸前高田市立博物館から猫淵神社へ向かった。猫淵神社とは猫を祀った珍しい神社である。以前は飯森沢の猫淵に鎮座し、宮城県横田不動尊のお使い猫を祀ったといわれている。この辺りは養蚕が盛んであったが、ネズミが繭を食べるという被害を被った。その当時農家は猫を飼っていたため養蚕に成功した。作業内容は午前には祀られている猫の絵馬や木像をダンボールに入れて博物館に持っていく作業や神社の清掃等幾度も階段を上り下りして行った。また午後に多くの絵馬を、劣化しているものしていないものに分け、個数を数えた。その次に絵馬の埃取りを皆で協力して行った。学芸員は博物館だけの仕事ではなく神社をはじめ地域の人々との関わりがあることを知った。

そして、3日目は猫の絵馬をほとんど欠けてないものをA、一部欠けているものをB、周囲の虫食いがひどいものをCに分け、それぞれ猫の数、向き、墨書きか、紙にまとめた。また大きさを計測すると、サイズや形は様々であった。見た目がきれいでも作業していると

机が木の粉等が散乱していた。19時以降は高田町のうごく七夕を見に行った。うごく七夕は山車が明かりを灯し、紙飾りが飾られていた。太鼓の音や屋台があり地元のにぎやかなお祭り行事という印象を受けた。

4日目は午前中に3日目に行った絵馬の計測や紙にまとめる続きを行った。この作業は皆の協力で成し遂げることができたと思った。15時以降は討論会をお世話になった博物館館長と主任学芸員と行った。今までの感想や質疑応答をさせて頂き、より深く博物館のことを学ぶことができた。

5日目の午前中はアース・アーク博物館に向かい展示を見学した。この博物館は1994年10月25日に開館され、気仙沼湾を見下ろす丘陵地帯の一角に位置している。また、天井が高く開放感のある博物館である。東北・北海道を中心とする民俗品、東日本大震災に関するものが展示されていた。民俗品の展示では絵が多く子供から楽しく知識を深めることができ魅力を感じた。また、震災当時の記録は写真と学芸員がその際思ったことが一緒に記載され、状況や被災された方の気持ちがよく伝わった。実際に残っていた被災物を見て大きな被害を受けたことを改めて知り、二度と起きて欲しくないと感じた。そして午後には津波記念碑の拓本を採った。和紙を石碑の大きさに合わせることや文字が墨で潰れないようにすることに苦労した。

この実習を通じ、学芸員が実際に行う仕事に携わるという貴重な経験をすることができた。1つ1つの工程があり仕事の大変さを学ぶことができた。実習で得たことをいかし博物館について幅広い視野で知識を増やしたいと考えている。

陸前高田市立博物館 2019年8月5日(月)～9日(金)  
現代家政学科4年 横田 茉緒

8月5日から9日までの計5日間、陸前高田市立博物館にて博物館実習をおこなった。同館は昭和34年に開設され、東北地方で最初の登録博物館である。平成23年3月11日の東日本大震災の被害により、多くの資料が被害を受け、当時の学芸員の命も奪われた。被災後は、1次レスキューと2次レスキューがおこなわれ、全国の学芸員、博物館、さらに自衛隊の協力のもと、多くの力を借りて資料を救出した。現在も処理を施し、2021年の新博物館の開館に向けて整理がなされている。

実習は、主に陸前高田市立博物館でおこなわれた。初日は、陸前高田市立博物館の説明を受け、館内を案内して頂いた。実習内容は、資料の運搬・整理・計測、塩分濃度の計測、水あげ作業、しほり、洗い方の見学



など多岐にわたった。特に印象に残った作業は、陸前高田市矢作町にある猫淵神社へ行き、猫の木像や猫の絵馬の回収・運搬、計測という貴重な作業に携わらせてもらったことである。

まず猫淵神社とは、日月神社の境内にある「猫」を祀った神社である。神社の中には、猫の木像や絵馬が数多く奉納されている。実習2日目に学芸員の方たちと猫淵神社に行き、本殿の中で猫の木像と絵馬の回収作業にあたった。木材は絵馬の欠片と思われるものも含めすべて回収し、劣化の激しいものは薄葉紙で包んだ。回収後は、神社内の清掃をおこない学芸員の仕事の丁寧さが感じられた。博物館に戻ると回収したものの汚れを刷毛で取り除き、状態を確認し、欠けているもの同士のペアを見つける作業をした。

3日目の朝は、被災した紙の資料の塩分を取り除く作業を手伝わせていただいた。手作業で水あげをおこない、ひとつひとつのケースから水を少量採取し、塩分濃度を計測した。ケースには資料の入れ違いのミスが起こらないよう、テープに番号などが書かれている。その後は、猫の絵馬の計測作業をおこなった。計測は縦・横・厚みを測り、通し番号をつけていく。それ以外にも、猫の数や向き、文字の記載、欠けの位置など細かく記入していった。しかしこの作業は、炭が薄くなってしまい解読不可能なものや、劣化が激しくもろいものなど、計測は極めて難しいものであった。4日目も引き続き、猫の絵馬の計測をおこなった。作業に慣れてくると、絵馬の欠け部分を記憶し欠片と組み合わせ、元の絵馬に修復できるようになった。この業務は慣れが大切であり、バラバラになってしまったものを自分の手で最初の形に戻すことができたという達成感を味わうことができ、とてもやりがいのある仕事であった。最後に学芸員の方との討論・質疑応答の場を設けていただき、今回おこなった作業以外に、被災した博物館ならではの問題、人とのつながりを教えていただくことができた。

最終日は、気仙沼市にあるリアス・アーク美術館の見学をさせていただいた。この美術館の常設展示には、東日本大震災の震災資料が展示されている。被災した現場の写真を学芸員が撮影、それらに撮影者自らの言葉が添えられている。そして驚いたのは、実際に被災したもの「被災物」(リアス・アーク美術館ならではの表現)をそのまま展示していることである。私はニュースでは被災状況を把握していたものの、被災物を自分の目で見るとは思っていなかったので複雑な気持ちであった。家の一部、電信柱、洗濯機、人形に時計。それらは今私たちの身の回りにある当たり前のもの

のばかりであり、ニュースで報道されていた「瓦礫」と表現するには相応しくないと、実際に見たからこそ考えが変わった。劣化が進んでもそのまま展示をし、それらを見る新しい世代に被災の歴史を感じてもらう良い機会となると感じた。午後からは、陸前高田市に戻り有形文化財の「津波記念碑」の拓本をとった。震災で石碑に傷がついてしまっており、被害が大きかったと推測することができた。

5日間の実習を通して、学芸員は専門知識を持ち、さらに人とのつながりが重要であると学ぶことができた。被災地ということもあり不安もあったが、陸前高田市の方たちはとても温かく、陸前高田市立博物館は市民が支える博物館だと実感することができた。また、2021年開館予定の新博物館にも足を運びたいと強く思った。そして、自ら回収・計測という貴重な経験をさせていただいたので、この実習で得たことを生かし視野を広げ、より多くの知識を身につけていきたい。



猫淵神社の猫の木像

## 害虫調査報告書

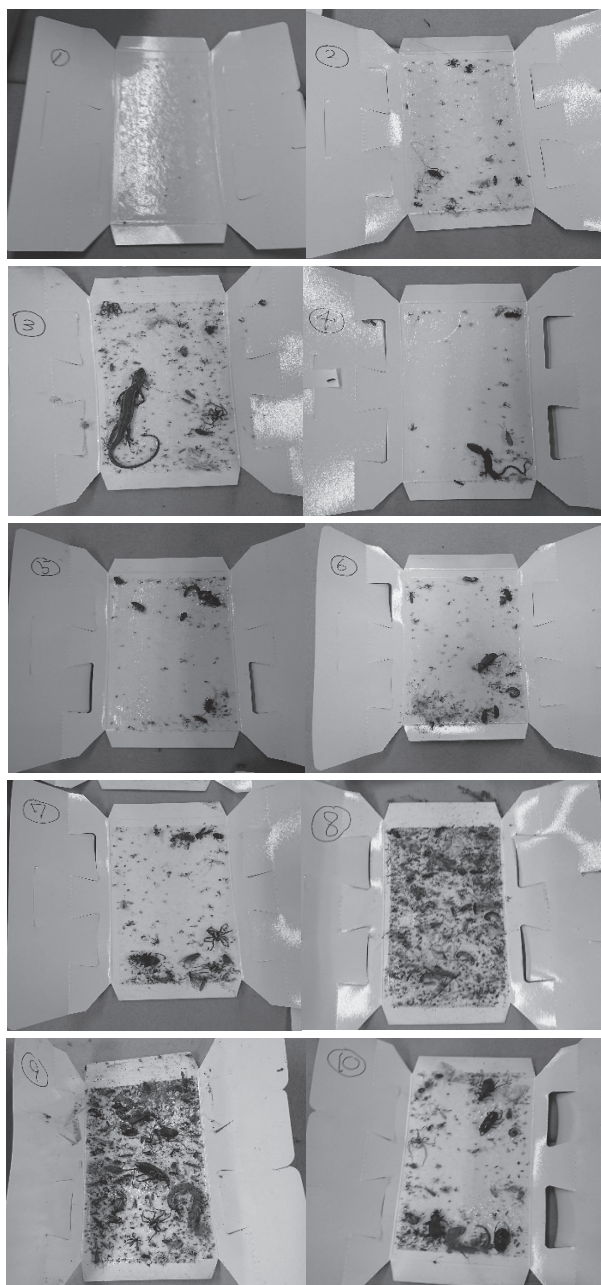
生活デザイン学科4年 田制 優美

博物館実習の授業の一環で町田キャンパスの生活文化博物館周辺の害虫調査を行った。害虫調査用のトラップを博物館周辺に10か所設置した。期間は約2か月間である。



トラップの設置場所を記入した構内マップ

博物館内に3か所（①,④,⑤）、博物館入り口付近に2か所（②,⑦）、構内入り口付近に4か所（③,⑧,⑨,⑩）、廊下に1か所（⑥）設置した。調査を開始したときは構内入り口が最もひどく、博物館入り口付近と廊下がその次に、博物館内にはほとんどみられないと予想した。結果は以下のとおりである。



これらを5段階に分類した。

とても少ない	少ない	まあまあひどい	ひどい	とてもひどい
①	②	④、⑤、⑥	③、⑩	⑦、⑧、⑨

表1 害虫調査の段階分け

博物館の真ん中に設置した①はほとんど虫が見られなかった。しかし、博物館の外寄りに設置した④と⑤は虫が少し多く見られ、虫以外のものも発見された。⑤の近くに置いた②は博物館の外だったが⑤よりも少ない結果となった。構内の入り口に最も近い博物館の入り口に置かれた⑦や、構内入り口付近に置かれた③,⑧,⑨,⑩は虫がかなり多くみられ、虫以外のものも発見された。構内入り口付近の外に置いた⑧と⑨は、特に虫が多く様々な種類の虫が発見された。

回収した害虫調査のトラップの虫を観察し、文化財害虫であるか文化財害虫事典を使用して判断する。チャバネゴキブリの幼虫や、成虫になりかけが合わせて3匹ほど見つかったが、他の虫は私では文化財害虫と判断できなかった。全体を見ると、一番多いのは翅のついた小さな虫で、虫を餌とする蜘蛛やイモリなどが見られ、生活文化博物館の文化財が害虫により汚染されている可能性が考えられた。

これらの結果をもとに改善していきたいが、大学の構造の問題（博物館と外の入り口がかなり近く、常に外への入り口が開いている等）が大きく関わっていると考えられるため、簡単には改善できないと考えられる。



害虫調査の段階分けの写真